

おめでとう

第28回 読書感想画コンクール 茨城県高等学校の部

佳作 2年6組 加来 龍太郎 佳作 1年5組 伊藤 夢絵

図書館報

平成29年
2月28日
発行

茨城県立取手松陽高等学校図書委員会

佳作に二作品が入賞！

平成二十八年度第二十八回読書感想画コンクール茨城県高等学校の部において、本校二年六組の加来龍太郎さんと一年五組の伊藤夢絵さんの両名が佳作に入賞しました。おめでとうございます。



指定図書部門佳作

「すしのひみつ」

日比野 光敏 著

二年六組 加来龍太郎

私は、小さい頃から寿司が好きです。まずこの「すしのひみつ」を読んでみて、寿司が生まれたのは日本ではなく東南アジアだということに驚きました。それに寿司の歴史はとても長く、この歴史をうまく伝えるつもりで絵を描きました。作画では特に背景を頑張りました。美しく見せるよう明るい色を乗せ、丁寧に塗りました。この作品で寿司をたくさん描くことができて満足です。

自由図書部門佳作 作品名 『OWN』

「光媒の花」 道尾 秀介 著

1年5組 伊藤夢絵

誰もが自分の中に光と闇を持つ。時間を重ねて失われつつある透明な心。それを取り戻す為懸命にもがき、抜け出すことのできない苦しみ。生きることへの希望をもたらし鍵を求めてさまよう日々。そしてその鍵は、きっと自分自身の中にある。読み終えたとき、そんな気持ちにさせられた一冊だった。

闇の中をさまよう蝶と光の中を飛び交う蝶で人が抱える二つの世界を表現し、自ら放つ心の光が蝶を羽ばたかせるイメージを描いた。



先生方の推薦本

『推薦の本、あれこれ』

・司馬遼太郎の作品集

『竜馬がゆく』、『坂の上の雲』、『燃えよ剣』など

土佐脱藩の志士、坂本竜馬の劇的な生涯を描いた『竜馬がゆく』。『喧嘩師』新撰組副長の土方歳三の生涯を描いた『燃えよ剣』。大動乱期を必死に生きた人々……

・ここには、小さな国が開化期を迎えるころの人々の高い志が壮大に描かれている。主人公はまさに「この時代の小さな日本ということになるかもしれない」（『坂の上の雲』より）読み進めていくうちにどんどんはまってしまいう人も多いかもしれない。

・内村鑑三 『後世への最大遺物』

この作品は、明治二十七年、内村が三十三歳の時、箱根の芦ノ湖において講演を行った記録である。「天地は失せても失せざるものがあります。」と述べ、「後世へわれわれが遺して逝くべきものについて」は何があるかと語っていく。みなさんだったら後世に何を残そうとするだろうか。そして、内村の考えは……

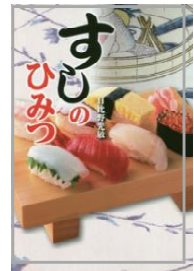
・丸山真男 『であることとすること』

この作品も昭和三十三年、北海道での講演記録であり、高校三年生の現代文（評論）の教科書に多く採録されている。対象となるものを、二つの物差し（のどちらで考えるのがよいか。「であること」か「すること」か。事例を挙げながらわかりやすく説き進めていく。

・道尾秀介の作品集

『ラットマン』、『ソロモンの犬』、『カラスの親指』など

二十八年九月に本校でも撮影された、二十九年全国公開予定の映画『名前』（津田寛治、駒井蓮ダブル主演）の原案を書いた、つくばみらい市在住、あの直木賞作家の道尾秀介である。読んでいくうちにいつのまにか「道尾ワールド」に入り込んでしまっている自分……
……これぞ、道尾のテクニク！



「思考の整理学」

外山滋比古 著

昨年、本校図書室で「まちの本屋」（田口幹夫）という本を借りて読みました。著者は岩手県盛岡市にある、さわや書店フエザン店の店長ですが、地域に本を根づかせるための様々な奮闘が紹介されています。さわや書店は、売れていなかった「永遠の0」や「思考の整理学」をベストセラーにした実績を持っています。

「永遠の0」は以前読んで、岡田准一主演の映画も良かったので、「思考の整理学」も読みたくなりました。三十年以上前の発売当初から少しずつ売れていて、二十一年間で十六万部だったのが、二〇〇七年にさわや書店の店員が書いた「もつと若いときに読んでいれば：そう思わずにはいられませんが、せいでした」というポップのおかげで、じわじわと人氣が全国的にひろがり、今や二〇〇万部にまで伸びているそうです。難しそうな題名なので、専門書かと思っていました、エッセイで読みやすい本です。

最初に「グライダー」の話があります。学校はグライダー人間の訓練所で、ここで優秀な成績をおさめたからといって、自分の力で進む能力を持つ飛行機人間にはならない。実社会に出れば、自力で悩んで方向づけ解決していかなければならない。高校教員としては耳の痛いところではありますが、なるほどと思わずにはいられません。

「発酵」という話では、何か物を書くときには、素材とアイディアはメモし寝かせ、組み合わせを考える。そして一旦忘れて、別の場所に移すことが大切だと書かれています。対象を正視しつづけることは、かえって思考の自由な働きを妨げることになるからです。

他にも、思考や知識の整理のためのノートの作り方、集めた知識の抽象化、書くことによる思考の整理、垣根を超えた談論、など様々なテーマについて書かれていて、自分はどういう考え方をしているのか、ということを意識するきっかけになりました。若くはない私よりも、これから文章を書く機会が増えていく若い高校生の皆さんには、さらに参考となる良書であると思います。

「服を着たゾウ」(『マイ国家』)

星新一著

「なぜ勉強をするのか」とか「なぜ勉強をしな
ければいけないのか」とか、そういう思いをした。続
経験はないでしょうか。未だにその疑問を持ち続
けている人もいます。私は高校生のととき、
その答えが分からず、とりあえず受験勉強のため
に「やらなければならぬもの」としてわりきつ
ていた記憶があります。しかし、大学二年の私は、
短編小説集『マイ国家』（星新一著）の中にある「服
を着たゾウ」という話を読み、「なぜ勉強するのか」
という問いについて考えさせられました。

「おまえは人間だ」という催眠術をかけられたゾウが人間としてふるまうようになると、やがてテレビに出て演じ、遊園地やおもちや会社を良心的に一生懸命経営して大成功をおさめる。という話なのですが、話の最後にゾウが人間に対して問いかけます。この最後のくだりが星新一らしいシニカルな問いかけになっているのです。

「わたしの心の奥に、おまえは人間だ、という声があひそんでいるのです。しかし、人間とはなにか、わたしにはよくわからなかった。そこで、本を読んで勉強したのです。人間とはどういうものか、人間なほをすべきか、などについてです。つねに学び、考え、その通りにやってきました。私が世の中の役に立っているとすれば、このためかもしれません。あなたがた、自分が人間であると考えたことがおありですか。」

分のために、世の中のために役に立たないものであるからといって、人間の社会で生きていく私たちのために、勉強は、自
分のためだけに、世の中のために役に立たないものであるからといって、勉強は、
という当たり前のことをゾウが教えてくれます。他に……

も、私たちの人間社会の核心をつくような短編小説がなくてはいけません。
たくさんありますので、ぜひ一度読んでみてください。

櫻井 幸一郎先生

「日本婦道記」

山本 周五郎 著

来、「さぶ」という山本周五郎の作品を読ん
 品を讀み、その度には、温かい気が持
 ある作品の中にも、日本婦道記「は短
 なる作品のため読みやすい。この中に
 主人公は自分と読みました。登場する
 主人は、自分的には、もういっしょに
 い人物ばかりで、読んでいくうちに耳
 であるが、内容であつた。どい、高校
 動した。この作品で、は、何度読み返

主人公のお高は、父・弟と共に暮らしていた。母は亡くなつてゐる。数年前に父親が病に倒れ、まだ幼い弟に家督を譲つた。生活は苦しく、高い内職でどうにか賄つていた。このように貧しい暮らしをしてゐたお高であつたが、お高には實の両親や兄弟がいた。お高が生まれた當時、実の親は下級武士で食糧が少ないうちに次々と子どもが生まれたため、お高を現在の家にやつたのである。その後、不思議なほどの幸運に恵まれ、どんどん出世したため、裕福に暮らしてゐた。そうするとよその家によつたお高のことが、気になり、人を使つて調べさせたところ、とても貧しい暮らしをしてゐるというを知り、何としてでも引き取ろうということになった。そうすることがお高にとっては幸せなのだと思へた。現在の父も、何とかしてお高を実の家に居着かせたが、お高は育ててくれた父に対して

「新聞記者が語り継ぐ戦争 1」

終戰前後」

読売新聞大阪社会部

この本は、昭和五十九年に単行本にされたものです。当時、戦後三十九年、現在とはという戦後七十二年になります。今では日本が戦った「戦争」について、その経験・記憶を語れる人は少なく、それを直接耳にすることは稀になってきています。

内容は、読売新聞大阪社会部の記者たちが、それぞれの戦争の経験・記憶を「新聞小説のかたち」にして新聞に載せたはじめの九年間のものをまとめたもので、彼らのペンを走らせたのは「いま残さないとなくなってしまうものになる」という思いでした。

あとがきに書かれているものです。「八月十五日が近づくたびにきまって登易するいわゆる『戦争もの』が

九月の声を聞くに潮のようにそろつて消えてゆく。毎年のようにいつも（そのことが）心にひつかかつていた。『戦争もの』でなく戦史でも戦記でもない私たちの周辺にあつた戦争の断片を書こう。一次の記述もありまゝです。「割れかけの卵のような平和社会である現代に生きている新聞記者として、次に語り継いでゆけるものはそれしかないと思う。」再びあとがきに「私はひそかに、しかし非常に強く思っている。もし戦争という怪物と闘うことができると思へば、それは情念というものしかないのではないか」とあります。

この本が出版された頃 私はヒナを抱えたメンドリの心境で毎日を過ごしていました。静かに眠っている子を横にして、夜毎、涙を流しながらこの本を読み進んだ思い出があります。この子がこのような経験をするなどありませんようにと念じながら。

戦争を知らない世代の私ですが、この本を皆さんに薦めることで「戦争を語り継ぐ」一助となればと願っています。ぜひ読んでいただきたい一冊です。

鈴木 史子先生

「あなた様以外に私の父はおりません、亡くなった母上様以外に私の母はおりません。」と言ひ切り、何不自由なく幸せに暮らせたであらう權利を捨て、貧しくとも心のつながりのある父や弟との暮らしを選んだ、といった内容である。

現在、ほとんど不自由を感じない生活をしている我々にとつて、何でも手に入るような暮らしをすることゝが一番の幸せなのではないか、と思つてしまふことは否めないだろう。しかし、物で心を満たされることよりも人と人のつながりによつて心を満たされることとして義理や人情を忘れない人間になりたいということも改めて感じさせられ、何度も読み返したくなる作品である。

この中に収められている作品はみな秀作であり短編でもあるので、とても読みやすい。ぜひたくさんの人に読んでもらいたい本である。

饗場 千晶先生

委員活動

藏書整理



12月16・17日保護者面談中の午後蔵書整理を行いました。整理され使いやすくなった図書館へ是非来て下さい。

図書委員の推薦本

「また、同じ夢を見ていた」

住野 由る 著

この本は主人公の女の子が猫の「彼女」と一緒にあばずれさんと呼んでいるお姉さん、南さんと呼んでいる高校生、そして一人暮らしのおばあちゃんのことくを巡りながら、「幸せ」の姿を追求していく話です。今回の話を紹介したいと思ったのはまず読みやすいからです。一文一文があまり長くなって、内容が頭の中に入っていきます。しかし、だからと言って内容がペラペラに薄いわけではありません。しっかりと内容が心理描写もあります。また、会話文もたくさんあり、高校生でも楽しく読むことができます。

「人生はフリンミたいなものよ。」この意味分かりますか？ 気になった方はぜひ読んでみて下さい。

一年二組 木内 菜々美

一年を振り返って

私は、一年生の時から図書委員をやっていました。一年目は数名の生徒が本を読みに来ていましたが、次の年にはほとんど来なくなり、図書館が寂しく感じられました。しかし、コンピュータが今年の冬、新しくなりましたので、これを機に本を借りる人が増えるようになってくれると思います。文化祭では、多くの人が、本を買いたいので、本を借りる人が増えるかです。特に昼ごろから来場者が多かったのが印象に残っています。

私自身、一・二年生の時はともかく、三年次には図書委員長として、課外授業とかぶつてしまいいろいろな委員の仕事に参加できなかったのは少し心残りでした。今後は、本を読みたい人が増えてくれると嬉しいですね。

図書委員会委員長
三年一組 井上 智絵